

■赤松小三郎 洋式兵学者。日本近代化を先駆するも、譜代大名の藩士だった故、熱心に教えた薩摩藩の門下生に暗殺された。

あかまつこさぶろう

天保大飢饉始1833=

信濃国上田城下で、上田藩の軽輩芦田勘兵衛の次男に生まれ、清次郎と名付けられる。諱は友裕。

大塩平八郎乱1837= 4歳：

天保改革弾圧1842= 9歳：

幼時より、和算が好きで、藩校の(明倫堂)に学び、竹内善吾の高弟植村重遠に師事、

阿部正弘首座1845=12歳：

国定忠治疎・1850=17歳：江戸に遊学。幕臣で数学者の内田弥太郎の{マテマティカ塾}に入る。

尊徳報徳論・1851=18歳：「天文秘略抜書」を写本するなど、研鑽し、門人帳の上位に名が出る優秀さを見せ、

万次郎帰国・1852=19歳：内田の紹介で、西洋兵学者の下曾根金三郎にも師事して、西洋砲術を学ぶ。

ペリー来航・1853=20歳：帰郷して、赤松弘の養子となり、藩の数学助教兼操練世話役に任じられる。

安政大地震・1855=22歳：幕臣勝海舟の従者として長崎海軍伝習所に入り、オランダ人より語学、航海、測量、騎兵学等を学び、

蕃書調所・・1857=24歳：オランダ語の原書から、*新式のミニエー銃の性能を詳述した「新銃射放論」を翻訳・出版、

五ヶ国条約・1858=25歳：オランダ陸軍の銃の使い方の教則「矢ごろのかね 小銃こう(穀の禾が弓)率」や「選馬説」を翻訳・出版。勝のもとを離れ、第3期伝習生として長崎入りしていた旗本の小笠原鐘次郎に従って騎兵学を学んでいる。

安政の大獄・1859=26歳：伝習所の閉鎖で、江戸に戻る。

桜田門外変・1860=27歳：養父の病没により、赤松家を相続。*日米修好通商条約の批准使節を乗せた{ポーハタン号}の護衛艦として、勝を責任者とする{咸臨丸}が派遣されることになり、乗船を強く希望するも、前年に藩主が失脚したこともあって叶わず、失意のうちに帰郷、無念に満ち溢れた句の並ぶ詩文集「塚塚」を著す。

遣欧使節・・1861=28歳：小三郎に改名。和宮東下のための中山道警備に就き、

生麦事件・・1862=29歳：調練調方御用掛として、軍制改革に参加、

8月18日政変 1863=30歳：続いて、砲術道具製作御掛となり、藩の兵制の洋式化に務める一方、大胆な「藩制改革意見書」を提出。藩外でも知られるようになり、破格の縁談で、百石の松代藩士の娘と結婚。その縁で、松代に塾居する佐久間象山と会い、彼からも才能を認められるが、

禁門の変・・1864=31歳：象山は暗殺。*第一次長州征伐に従軍で、江戸詰になると、横浜との間を往復、駐屯するイギリス騎兵士官ヴァインセント・アプリン大尉から、騎兵術、英語を学び、イギリスの兵学書「英国歩兵練法」翻訳に着手、

薩摩藩士密航1865=32歳：勝を訪問し、下曾根塾で砲術を再び学びながら、同僚になった金沢藩士(のちの)南郷茂光とともに翻訳を進めるうち、英国式兵学を学ぼうと上府した。*第二次長州征伐が起こると、一念発起して上洛、烏丸に英国式兵法塾を開くとともに、「英国歩兵練法」を刊行、日本で最も早い、英国の専門書からの直接の翻訳で、名声が一気に諸藩に広まり、大盛況になる。門下生には、各藩士から新選組の隊士までが含まれ、とくに、薩摩藩からは、野津の推薦で、兵学教授として招聘され、京都の藩邸で、野津の兄で塾頭の野津鎮雄はじめ、中村半次郎・村田新八・東郷平八郎・樺山資紀ら錚々たるメンバーを含む約800人に英国式兵学を教え、練兵も行つて、薩摩藩の兵制を蘭式から英式へと改変するのに指導的役割を果たした。さらに、幕府に、長州征伐を批判し、人材登用の拡充を提案する「方今世上形勢の儀に付忤恐奉申上候口上書」を提出、幕府に認められ、開成所教官兼海陸軍兵書取調役へ推挙されるも、上田藩は必要な人物であると断り、帰藩を促してきたが、病気を理由に京都滞在を続け、藩士の松平忠礼に藩内の身分制度撤廃と言論活動の自由を求める建白書を提出。

薩長同盟・・1866=33歳：価値観を共有する会津藩士山本覚馬と出会って親交、その依頼で、友人の西周と共に、会津藩洋学校の顧問になり、薩摩藩との交渉も懇請される。*薩摩藩の依頼で、「英国歩兵練法」を、イギリスの改定版原本に基づいて翻訳し直し、「重訂英国歩兵練法」(七編九冊)を出版、大いに喜んだ島津久光から、当時の世界でも最新式の騎兵銃を贈られ、重訂版(薩摩藩版)は巷に流布しないよう、厳重な管理下に置かれた。開明的な思想を持つ前福井藩主松平春嶽との謁見も実現、坂本龍馬の「新政府綱領八策」よりも先んじて、普通選挙による議院内閣制と同様の考えまでも含む、教育から産業まで幅広い提言「御改正之一二端奉申上候口上書」を提出、島津久光と幕府にも、同様の建白書を提出している。薩摩藩が長州藩と武力討幕計画を固める中、内戦の危機を回避しようと、「幕薩一和」を求めて、薩摩の西郷隆盛や小松清廉、幕府の永井尚志らとギリギリまで交渉、上田藩より度々召還命令を受けたが拒否を続けたものの、呼び戻され、出発直前、京都東洞院通りの店で、偶然を装って出会った薩摩藩士で門下生の中村半次郎と田代五郎左衛門に暗殺された。

大政奉還・・1867=34歳：

価値観を共有する会津藩士山本覚馬と出会って親交、その依頼で、友人の西周と共に、会津藩洋学校の顧問になり、薩摩藩との交渉も懇請される。*薩摩藩の依頼で、「英国歩兵練法」を、イギリスの改定版原本に基づいて翻訳し直し、「重訂英国歩兵練法」(七編九冊)を出版、大いに喜んだ島津久光から、当時の世界でも最新式の騎兵銃を贈られ、重訂版(薩摩藩版)は巷に流布しないよう、厳重な管理下に置かれた。開明的な思想を持つ前福井藩主松平春嶽との謁見も実現、坂本龍馬の「新政府綱領八策」よりも先んじて、普通選挙による議院内閣制と同様の考えまでも含む、教育から産業まで幅広い提言「御改正之一二端奉申上候口上書」を提出、島津久光と幕府にも、同様の建白書を提出している。薩摩藩が長州藩と武力討幕計画を固める中、内戦の危機を回避しようと、「幕薩一和」を求めて、薩摩の西郷隆盛や小松清廉、幕府の永井尚志らとギリギリまで交渉、上田藩より度々召還命令を受けたが拒否を続けたものの、呼び戻され、出発直前、京都東洞院通りの店で、偶然を装って出会った薩摩藩士で門下生の中村半次郎と田代五郎左衛門に暗殺された。

中村半次郎はその日記で「幕奸(幕府のスパイ)だから斬った」と記述、薩摩の内情を知り尽くす人物を譜代大名のもとに返すわけにはいかなかったということであろう。薩摩藩の組織的な犯行であったと考えるのが自然で、薩摩藩によって、盛大な葬儀が行われ、島津家からは、300両の忌慰金が贈られ、京都黒谷にある浄土宗本山の一つ金戒光明寺に墓がつくられた。教え子であった東郷平八郎は、日露戦争に勝利した翌年、善光寺における日露戦争戦没者慰霊祭出席の帰途、上田に立ち寄り赤松の墓参を行い、1924年に、赤松に従五位が追贈されると、赤松顕彰碑の碑文を揮毫するなど、恩師に繰り返し弔意を示している。「新銃射放論」は、維新後、佐久間象山の弟子武田斐三郎が教官を務めた箱館の諸術調所から、駿府学校に持ち込まれた。